

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 THE JAPAN BRANCH OF THE DICKENS FELLOWSHIP

令和 6 年度春季総会プログラム ANNUAL GENERAL MEETING 2024 PROGRAMME

日時：2024 年 6 月 8 日 (土)
Date: 8 June 2024 (Sat)



会場：福岡大学
(〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1)
Venue: Fukuoka University
(8-19-1 Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka 814-0180)

総会会場 General Meeting room: 中央図書館 1 階多目的ホール University Library
Multipurpose Hall

(しっかり蓋のできる飲み物のみ持ち込みが可能です drinks with lids allowed to be brought in)

理事会 Trustees Meeting room: 文系センター棟 5 階共同研究室 Humanities and Social
Sciences Center 5F Joint Research Lab

12:15 理事会 Board of Trustees Meeting

13:00 開会 Opening Address

松本靖彦 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部長)
Yasuhiko Matsumoto (President, The Japan Branch of the
Dickens Fellowship)

13:05 総会 General Meeting

13:30 – 14:45

講演 Lecture

司会：木島菜菜子（同志社女子大学）Nanako Konoshima
(Doshisha Women's College of Liberal Arts)

講師：David Chandler（同志社大学）David Chandler (Doshisha
University)

**“Popular Novel to Popular Stage: The Case of *Jack Sheppard*
(1839), with Some Dickensian Comparisons”**

15:00 – 17:30

文学カフェ鼎談 - ディケンズと共振（シンクロ）する作家たち
Book Cafe: Synchronization with Charles Dickens

司会：宮丸裕二（中央大学）Yuji Miyamaru (Chuo University)

案内人：伊藤正範（関西学院大学）Masanori Ito (Kwansei Gakuin
University)

「コンラッド『密偵』に見るディケンズ的都市と群衆の系譜」

“Genealogy of Dickensian Cities and Crowds in Conrad's *The
Secret Agent*”

森有礼（中京大学）Arinori Mori (Chukyo University)

「フォークナーとディケンズ－教養小説か、ミステリーか」

“Reading Faulkner and Dickens: Are Their Novels
Bildungsromans or Mysteries?”

宮原一成（関西学院大学）Kazunari Miyahara (Kwansei Gakuin
University)

「ゴールディングにとってのディケンズ－障壁転じて救いとな
す」

“What Dickens Meant to Golding: From a Discouragement to a
Guiding Hand”

17:40

閉会の辞 Closing Address

宮丸裕二（中央大学）Yuji Miyamaru (Chuo University)

18:15 懇親会 Convivial Party

会場: 福岡大学文系センター棟 16 階スカイラウンジ Humanities and Social Sciences Center Sky
Lounge (16F)

会費：一般 5000 円、学生 3000 円



講演・鼎談梗概 Synopsis

講演 Lecture

Popular Novel to Popular Stage: The Case of *Jack Sheppard* (1839), with Some Dickensian Comparisons

David Chandler

William Harrison Ainsworth's *Jack Sheppard*, the classic "Newgate Novel," commenced serial publication in *Bentley's Miscellany* in January 1839, just as *Oliver Twist* was coming to a conclusion in the same magazine. The two stories became strongly linked in the public mind, and for a time *Jack Sheppard* was the more popular of the two, with Ainsworth's novel clearly the biggest literary success of 1839. This talk will consider some of the elements that made *Jack Sheppard* so

successful, and focus, in particular, on the way these elements were adapted for the stage in John Baldwin Buckstone's pioneering theatrical version, first played on 28 October 1839. When Dickens' novels had been adapted for the stage, they had been shaped according to the conventions of burletta; by contrast, *Jack Sheppard* was turned into a melodrama, with music by G. Herbert Rodwell. The *Jack Sheppard* songs became a sensation, with "Nix My Dolly" becoming almost certainly the most popular song of the early Victorian period. There are thus fascinating questions here about why Ainsworth, not Dickens, was seen as particularly suited to the forms of melodrama.

文学カフェ鼎談

ーディケンズと共振（シンクロ）する作家たち

Book Cafe: Synchronization with Charles Dickens

司会：宮丸裕二

ディケンズが後世の文学全体に残したものを語り始めれば際限のないところであるが、後世の作家一人ひとりに焦点を当てて彼らがディケンズから受け取ったものということに思いを馳せると、それ自体がまた新たな視座を与えてくれるだろう。今回は小説研究の精鋭たる3名の案内人をお迎えして、ジョウゼフ・コンラッド、ウィリアム・フォークナー、ウィリアム・ゴールディングのお話を伺い、その中でディケンズがどう読まれどう活かされていたのかを考えることで、翻ってディケンズの新たな側面が浮かび上がればと期待している。鼎談ではありつつも「文学カフェ」と題し、案内人とフェロウシップ会員とが気軽に活発に意見を交わすことができる場として企図した。

なお、以下に案内人の方々より、ヒントとして宿題をいただいております。余裕のあります方はこちらの作品を予めお読みいただいております。余剰のあります方はこちらの作品を予めお読みいただいております。余剰のあります方はこちらの作品を予めお読みいただいております。

ジョウゼフ・コンラッド、『密偵』（別題『シークレット・エイジェント』；*The Secret Agent*, 1907）

ウィリアム・フォークナー、「熊」（"The Bear," 1942）；「あの夕陽」（"That Evening Sun," 1931）；『サンクチュアリ』（*Sanctuary*, 1931）；『墓地への侵入者』（*Intruder in the Dust*, 1948）

Intruder in the Dust の映画版（1949） [amazon.com では視聴可能ですが、国内サイトで見られる術は今のところないようです]

ウィリアム・ゴールディング、『我が町、ぼくを呼ぶ声』（集英社文庫、現在絶版；別題『ピラミッド』；*The Pyramid*; 1967）；『通過儀礼』（*Rites of Passage*; 1980）

作家が読んでいたディケンズ作品

Pickwick Papers (1836-37)

Nicholas Nickleby (1838-39)

Martin Chuzzlewit (1843-44)

Bleak House (1852-53)

「コンラッド『密偵』に見るディケンズ的都市と群衆の系譜」

Genealogy of Dickensian Cities and Crowds in Conrad's *The Secret Agent*

伊藤 正範

ポーランド（現ウクライナ）に生まれたコンラッドは、若き日に『荒涼館』や『ニコラス・ニクルビー』を読み、ディケンズへの賞賛と愛を募らせていった。やがて船乗りとなりイギリスに帰化、37歳で作家デビューを果たした彼は、船や植民地を舞台とした作品群で名を知られていくこととなる。そうした意味では、全編においてロンドンが舞台となる『密偵』（1907）は異色と言ってよい作品だろう。しかし犯罪と殺人が跋扈し、群衆がひしめくコンラッドの都市は、ディケンズの描いたロンドンの紛れもない延長線上に見えてくる。都市と群衆を鍵語に、コンラッドという異郷の作家をディケンズの系譜へと再配置する試みを行いたい。

「フォークナーとディケンズ－教養小説か、ミステリーか」

Reading Faulkner and Dickens: Are Their Novels Bildungsromans or Mysteries?

森 有礼

世紀転換期のアメリカ南部に生まれたウィリアム・フォークナーにとって、ディケンズはその生涯を通じて愛読書の一つであった。フォークナーが生み出した、南部を舞台としたヨクナパトーファという物語世界とそこに登場する多種多様な人々が織りなすゴシック趣味の強い物語は、彼がディケンズに深く傾倒し、そこから何らかの影響を受けていたことを思わせる。本発表ではフォークナーの歴史認識の特性にも触れつつ、『サンクチュアリ』（1931）と「あの夕陽」（1931）を中心に扱いながら、ディケンズに通じるフォークナーの（もしくは彼がディケンズから得た）子供のイニシエーションとトラウマの問題を、ミステリーというジャンルの特性と絡めて論じてみたい。

「ゴールディングにとってのディケンズ－障壁転じて救いとなす」

What Dickens Meant to Golding: From a Discouragement to a Guiding Hand

宮原 一成

1954年に長編小説『蠅の王』で鮮烈な作家デビューを果たしたウィリアム・ゴールディングは、そのあと5年間ほどは快調に筆を揮っていたのだが、1960年代中頃から長期のスランプに陥り、まともな長編小説が書けなくなってしまう。その休筆期間中にゴールディングは文学を語る講演を数回行っている。その中に《作家心得の手ほどき》のような内容のものがある。その、休筆期が終わりに近づいた頃に行われた講演の内容を見ると、ディケンズ作品の再読が、小説家ゴールディングの復活にかなりの寄与をしたのではないか、と思わせるところがある。そんな憶測を、幼少期のゴールディングにとってディケンズがどんな作家であったか、という点に絡めながら膨らませてみたら面白いかも、というのが本発表の狙いである。